

# 小学校英語教育に対する児童および保護者の 態度に関する調査研究 (Ⅱ)

—保護者の態度に関する調査から—

寺尾 裕子 古川 雅文

(兵庫教育大学)

金 榮淑

(大邱教育大 學校)

鈴木 正敏

(兵庫教育大学)

2003年7月に学校教育研究センターのプロジェクトメンバーは、小学校で英語活動を経験している児童およびその保護者が小学校英語教育についてどのような意見・態度を持っているかについて質問紙による調査を行った。本稿は2003年11月に「兵庫教育大学・小学校英語教育研究プロジェクトチーム」によってなされた報告書を基に新たに論文としてまとめたものである。時代の要請に合わせて英語教育が導入されたと考えられる国立大学(2003年当時)附属小学校において、児童とその保護者が英語教育をどのように受け止めていたかについて記録しておくことは当時および今後の英語教育を考える上で貴重な資料となると思われる。今回は、保護者の態度について報告する。

調査結果からは、ほとんどの保護者が小学校からの英語教育に賛成の態度を示していた。ただ、英語学習の内容については、興味はあるものの、あまり知らないとする保護者が多かった。北條(2003)では、小学校の英語活動で希望する内容として「アルファベットの読み方・書き方」「簡単な英語単語の読み方・書き方」「簡単な英文の読み方・書き方」が挙げられているが、本調査では、「読み書きに」についての希望は低い。中学校の生徒の保護者との違いが指摘できる。外国語活動が制度化されることになった現在、保護者の希望通りの教育が行われるのかどうか、保護者の英語教育に対する態度の傾向に変化がみられることになるのかなど今後の研究課題としてあげられる。

キーワード：附属小学校, 児童, 英語教育, 英語学習, 授業形態

---

寺尾 裕子：兵庫教育大学大学院・社会・言語教育学系・准教授, 〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

古川 雅文：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・教授, 〒673-1421 兵庫県加東市山国2007-109, 兵庫教育大学・学校教育研究センター, E-mail: Kogawa@hyogo-u.ac.jp

金 榮淑：大邱教育大 學校, Department of English Education, Professor, #1797-6 Daemyung 2 dong, Namgu, Daegu, KOREA, E-mail: kys@dnue.ac.kr

鈴木 正敏：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・准教授, 〒673-1421 兵庫県加東市山国2007-109 兵庫教育大学・学校教育研究センター, E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

---

## A Research on Attitude toward English Learning in an Elementary School (2): A Survey of Parents' Attitude

Yuko Terao and Masafumi Kogawa

*(Hyogo University of Teacher Education)*

Yong-Suk Kim

*(Daedu National University of Education)*

Masatoshi Suzuki

*(Hyogo University of Teacher Education)*

In July 2003, "English Teaching at the Elementary School Level" Project team members at the Hyogo University of Teacher Education's Center for School Education Research conducted a survey on English education at its attached elementary school. The purpose of the survey was to determine what children and parents/guardians think about English education at the elementary school. A questionnaire was developed by Project members and used in the study. This paper is written by the present authors and is based on the 2003 Project report by the Project members. It was important to recognize how both children and their parents consider the English education at the elementary school in 2003 when English education was not a compulsory subject.

As a result of the survey, most parents had a positive attitude toward the English education at the school. They had an interest in the English education for their children, but they did not seem to know the contents of the specific instruction. According to Hojo (2003), parents expect their children to learn the following: (1) reading and writing alphabets, (2) reading and writing simple words, and (3) reading and writing simple sentences. However, the parents in this study did not expect their children to learn reading and writing of alphabets, simple words, and simple sentences. In contrast, parents of junior high school children have a different attitude toward the contents of English education.

The conclusion of this paper suggests that further research is needed in the field of elementary education, especially since English is going to be taught at the elementary school level as required by the Ministry of Education, Sports, Science and Technology.

Key Words: attached elementary school, elementary school children, English education, English learning, contents of learning

---

Yuko Terao: Associate Professor, Social Studies and Language Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

Masafumi Kogawa: Professor, Center for School Education Research, Hyogo University of Teacher Education, 2007-109 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: kogawa@hyogo-u.ac.jp

Yong-Suk Kim: Professor, Department of English Education, Daedu National University of Education, #1797-6 Daemyung 2 dong, Namgu, Daegu, Korea, E-mail: kys@dnue.ac.kr

Masatoshi Suzuki: Associate Professor, Center for School Education Research, Hyogo University of Teacher Education, 2007-109 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

---

## 問題及び目的

この一連の研究に関する論文（I）では、児童の英語学習に対する態度について報告した（寺尾・古川・金・鈴木, 2008）。今回の論文では、保護者の英語教育に対する態度の調査結果を報告する。

小学校において英語を教えるべきかどうかについては、賛否両論あり、議論になっている。たとえば、ベネッセの調査によれば、小学生の保護者の7割以上が小学校英語に賛成している（Benesse教育研究開発センター, 2007）が、なお反対論も根強い。学校教育において、どのように教育を進めていくかについては、国際および国内の社会的・時代的背景、教育理論、認知発達理論など、幅広い見地から決められていくのであるが、教育を受ける側である児童生徒、およびその保護者の要望や期待も無視できない要素であろう。したがって、小学生の保護者の英語教育への関心や態度は、小学校英語学習をどのように進めるか、どのような内容で行うかについて、一つの指標となりうるであろう。

当該調査が実施された時点（2003）以後、小学校における英語活動の実践は、試みの段階は終了し、平成20年3月28日に改訂され新たな「小学校学習指導要領」によって、第5学年および第6学年で、それぞれ年間35単位時間の授業時間が確保されることとなった。本研究は、文部科学省が英語活動導入を決定する前（2003年）に行われたものであるが、当時の保護者の生の声が新しい学習指導要領の中に反映されているのかどうかにも目を向けたい。

## 方法

**調査対象者：**兵庫教育大学附属小学校2年生～6年生の保護者。調査に参加した保護者の数（回収された質問紙の数）は表1の通り。なお、兄弟姉妹が附属学校に同時に在籍している場合があるので、それを両方数えた場合の延べ人数と、便宜的に上級生の方で数えた場合の数を示した。

**質問紙：**質問紙は、4つのパートからなっていた。Part 1は、回答者の属性（性別、年齢、子どもの学年）に関すること、Part 2は、英語教育への興味関心に関する質問、Part 3は、小学校での英語学習の是非に関する質問、Part 4は、学習方法に関する態度を問うものであった。なお、Part 1のQ1とQ2は4件法、Q3～Q6は「はい」または「いいえ」の2件法、Part 2～Part 4は、「全然そう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答するようになっていた。個々の質問項目については、結果を参照のこと。

**調査時期：**2003年7月中旬。

調査手続：児童に持ち帰らせて、家庭で回答してもらい、各学級担任に提出するという留置法で行われた。

表1 調査に参加した保護者の数

学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
延べ人数	8	69	57	81	67	57	339
上級学年	0	63	55	80	63	57	318

次に、複数の学年にわたる保護者を上級学年でみたときの、回答者の性別と年齢は、表2の通りであった。

表2 調査に参加した保護者の性別、年齢（かっこ内は割合）

学 年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
母 親	53 (84.1)	44 (80.0)	70 (87.5)	53 (84.1)	50 (87.7)	270 (84.9)
父 親	9 (14.3)	10 (18.2)	9 (11.3)	9 (14.3)	7 (12.3)	44 (13.8)
それ以外	1	1	1	1	0	4
・不明	(1.6)	(1.8)	(1.3)	(1.6)	(0.0)	(1.2)
平均年齢	37.5	39.0	38.0	40.3	40.4	39.0

注) 平均年齢については、学年および年齢が明記されていた300名を対象として算出した。

## 結果

### Part 2 英語文化、英語学習への態度と経験

各質問について、それぞれの回答をした保護者の数とその割合を求めた。質問項目は、次の6項目であった。

- Q1 あなたのお子さんが小学校で受けている英語教育では、どのようなことが教えられているかご存じですか。
- Q2 あなたのお子さんが小学校で受けている英語教育に興味がありますか。
- Q3 中国や韓国では、小学校から英語が正式な教科として教えられていますが、ご存じですか。
- Q4 あなたのお子さんは、英語を習いに行っていますか。
- Q5 通信教育や家庭教師などで家庭での英語学習をしていますか。
- Q6 テレビの子どものための英語教育番組をお子さんに見せていますか。

附属学校での英語教育への興味関心を示す質問、Q1とQ2の結果を図1、2に示した。各選択肢を選択した人数に偏りがみられるかについてカイ二乗分析を行った結果、有意差が認められた ( $\chi^2(3)=289.70, p<.01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較 ( $\alpha=.05$ ) の結果、

「あまり知らない」>「だいたい知っている」>「全く知らない」≒「よく知っている」であった。図1に示されているように、「よく知っている」と答えた保護者は1.9%と少なく、「だいたい知っている」(34.8%)と合わせても、4割弱にとどまっている。「あまり知らない」と回答した保護者が最も多く(55.2%),全く知らない(8.2%)と合わせると、6割以上になる。

Q2については、「全く興味はない」という回答は無かったので、この項目を除きカイ二乗分析を行ったところ、有意差が認められ( $\chi^2=104.03$ ,  $p<.01$ ), 多重比較の結果、「かなり興味がある」>「あまり興味はない」≒「非常に興味がある」となった。図2から、「非常に興味がある」(16.3%), 「かなり興味がある」(59.2%)をあわせると、75%以上の保護者が小学校で受けている英語授業に興味を持っていることがわかる。「全く興味はない」(0.0%)「あまり興味はない」(22.9%)と回答した者は少なかった。

これらの結果から、附属小学校の英語教育に興味はあるのだが、実際にどのような教育がなされているかについてはあまり知らない保護者が多いという実態が明らかになった。

次に、Q3～Q6の質問については、それぞれの質問

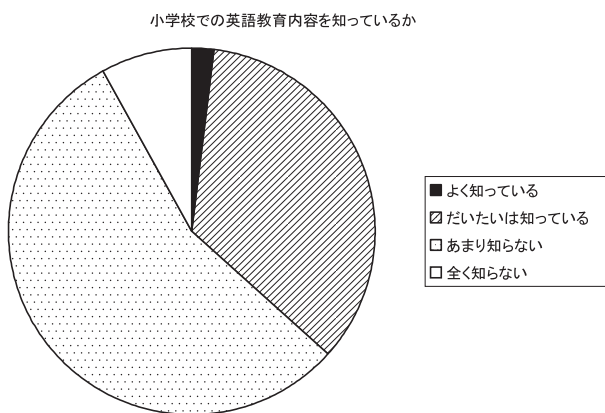


図1 小学校での英語教育の内容を知っているか

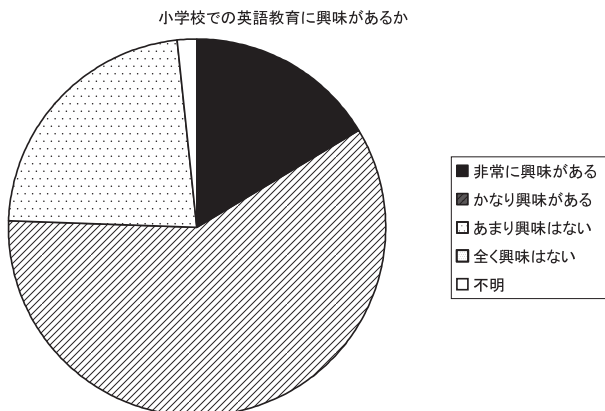


図2 小学校での英語教育に興味があるか

項目に対して各選択肢を選択した者の割合を図3に示した。この図から、中国や韓国で小学校英語が正式な教科として教えられていることについては、知っている人と知らない人がほぼ半々である( $\chi^2(1)=0.52$ , n.s.)。学習塾などへ英語を習いに行かせている者は3割程度(32.0%)( $\chi^2(1)=41.45$ ,  $p<.01$ ), テレビの英語番組を見させている者は1/4程度(24.1%)( $\chi^2(1)=84.57$ ,  $p<.01$ )と、比較的少なかった。通信教育や家庭教師で英語学習をしている者は6%( $\chi^2(1)=245.55$ ,  $p<.01$ )と、ほとんどいなかった。これらの結果から、小学校における英語教育に興味はあるものの、家庭での実際の対応を行っているような保護者はさほど多くない現状のようである。

### Part 3 英語学習の是非

小学校における英語学習の是非を問う質問(Q7～Q12)に関しては、「全然そう思わない」を1点、「非常にそう思う」を5点とするように、5段階の回答を点数化した。質問項目は、次の6項目であった。

- Q7 言葉の習得が早い小学生のうちから英語を学習するのがよい
- Q8 英語の学習は、中学生になってからでも十分間に合う
- Q9 これからの社会では英語は必要なので、小学生のうちから始めるほうがよい
- Q10 小学生のうち日本語の習得の方が重要なので、小学校では英語は学習しなくてもよい
- Q11 英語は受験にも必要なので、小学校でも学習する方がよい
- Q12 他の学習の負担になるので、小学校では英語を学習しなくてもよい

この得点に基づいた各質問項目の平均得点を高い順に示したのが図4である。項目間の平均値の差に関して、一要因分散分析を行ったところ、有意差が検出された( $F(5, 1570)=372.15$ ,  $p<.01$ )。LSD法による多重比較の結果、 $Q7 \approx Q9 > Q11 > Q8 > Q10 \approx Q12$ であった(以下、多重比較はすべてLSD法による)。

図4に示されているように、小学校での英語学習については、好意的な回答が多いようである。その理由として、「言葉の習得が早い小学校のうちから(Q7)」、「これからの社会では英語は重要なので(Q9)」といったことが高得点になっている。これらの平均値は、「かなりそう思う」の4点を超えている。逆に、「中学校になってからでも十分間に合う(Q8)」、「小学校では日本語の習得の方が重要なので(Q10)」、「他の学習の負担になるので(Q12)」といった理由での反対は、少なかった。これらの項目の平均値は、「あまりそうは思わない」の2点前後であった。

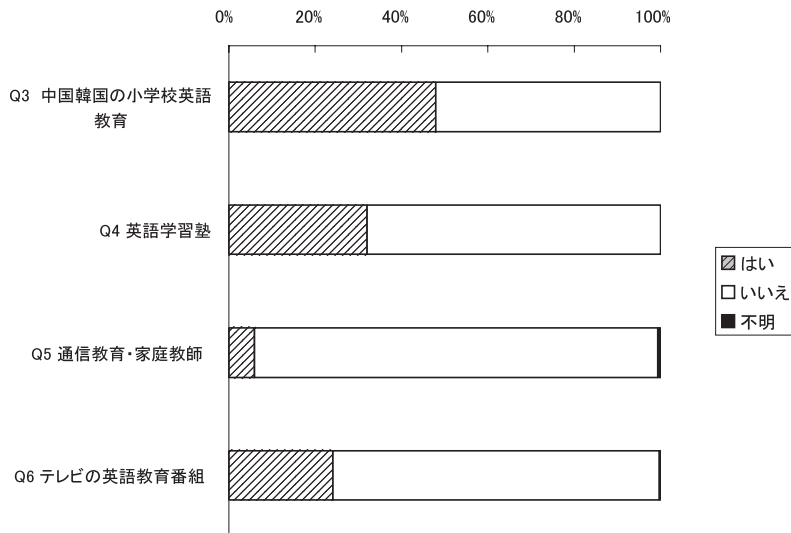


図3 小学生の英語学習に対する知識、及び実際にしていること

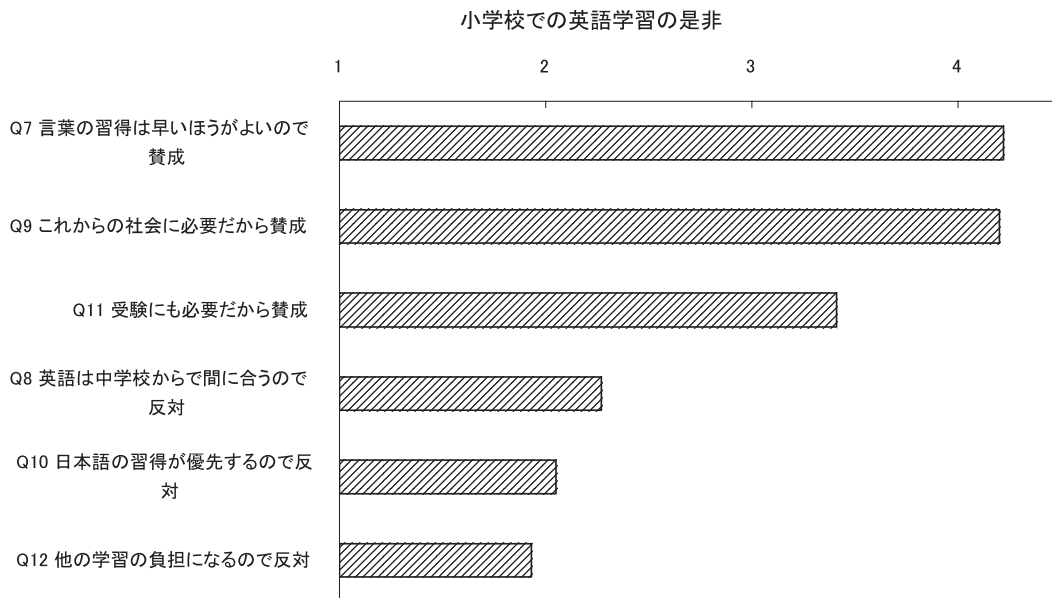


図4 小学校での英語学習の是非に関する質問項目の平均得点

Part 4 英語学習の方法

ここでは、小学校における英語学習の方法について、保護者がどう考えているかを聞いた。質問項目は、次の16項目であった。

- Q13 正式な教科として教えるべきだ
- Q14 総合学習などの一環として教えるべきだ
- Q15 英語クラブなど課外活動の一環として教えるべきだ
- Q16 英会話を重視するとよい
- Q17 外国人との交流を重視するとよい
- Q18 発音の指導を重視するとよい
- Q19 英語の読み書きを重視するとよい
- Q20 英語の単語を覚えることを重視するとよい

- Q21 英語の文法を重視するとよい
- Q22 楽しく遊んで、英語を好きになることを重視するとよい
- Q23 中学校で習う英語の基礎を習得することを重視するとよい
- Q24 英語に特有の発音やリズムなどに慣れることを重視するとよい
- Q25 英語を通して、海外の異文化に触れることを重視するとよい
- Q26 インターネットなどで英語を読めるようになることを重視するとよい
- Q27 CDやインターネットなど、興味をひく教材の活用するとよい

### Q28 小学校の英語教育では、英語を母国語とする補助教員（ALT）がぜひ必要である

このうち、最初の3問（Q13～Q15）は主として英語学習を行う時間について聞いており、残りの問は学習で重視すべきことについて主として聞いているので、ここでは別々に分析する。

以上の質問項目については、Part 3と同様に、「全然そう思わない」を1点、「非常にそう思う」を5点とするように、5段階の回答を点数化した。この得点に基づいた各質問項目の平均得点を高い順に示したのが図5および図6である。

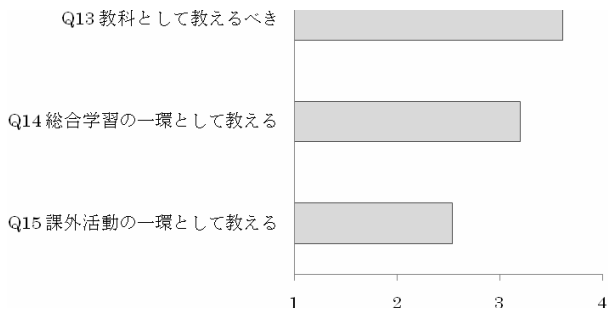


図5 英語学習を行う時間に関する質問への保護者の意見の平均得点

英語学習を行う時間に関する質問項目の平均値について、一要因分散分析を行ったところ、有意差がみられた ( $F(2,610) = 79.17, p < .01$ )。多重比較の結果、 $Q13 > Q14 > Q15$ であった（図5参照）。すなわち、保護者は、総合学習や課外活動の一環として教えるというよりも、正式な教科として教えるべきだという考えに最も強く同意している。

次に、授業で何を重視すべきかについて、図6に平均値を示した。分散分析の結果、有意差が認められた ( $F(12,3660) = 215.82, p < .01$ )。この図に示されているように、平均得点が「かなりそう思う」の4点を超えているのは、「Q22 楽しく遊んで、英語を好きになることを重視するとよい」、「Q24 英語特有の発音やリズムに慣れることを重視するとよい」、「Q28 小学校の英語教育では、英語を母国語とする補助教員（ALT）がぜひ必要である」、「Q17 外国人との交流を重視するとよい」、「Q16 英会話を重視するとよい」である。さらに、「Q25 英語を通して、海外の異文化に触れることを重視するとよい」、「Q18 発音の指導を重視するとよい」がこれらに続く。逆に、平均点の低かったものとしては、「Q21 英語の文法を重視するとよい」、「Q26 インターネットなどで英語を読めるようになることを重視するとよい」、「Q19 英語の読み書きを重視するとよい」、「Q20 英語の単語を覚えることを重視するとよい」、「Q23 中学校で習う英語の基

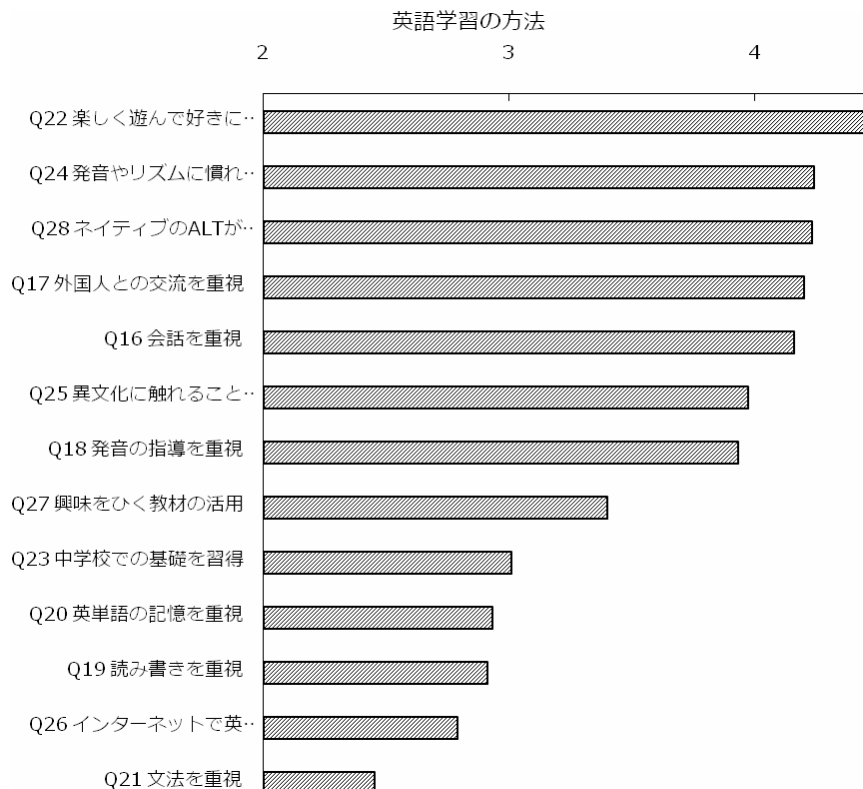


図6 小学校での英語学習で重視する内容に関する保護者の意見の平均得点

礎を習得することを重視するとよい」が下位5項目である。以上述べた3つの項目グループの間には、多重比較の結果、すべて有意差があった(Q22>Q24≒Q28≒Q17≒Q16>Q25≒Q18>Q27>Q23≒Q20≒Q19>Q26>Q21)。これらの結果から、文法や読み書きを中心とした、中学校の英語学習同様あるいは、受験のための英語ではなく、実際に海外で使われているネイティブの英語を、会話を中心に、楽しく学ぶことが多くの保護者から求められていると見てよさそう。

## 考 察

調査当時、国立大学附属小学校では第2学年から第6学年までの児童に毎週英語活動を実施していた。本調査における保護者は全て子どもが英語活動を経験しているということである。調査結果から、75%以上の保護者が小学校で子どもが受けている英語の授業に興味を持っているが、実際に教えられている内容についてあまり知らない保護者が多いという実態が明らかになった。さらに、小学校での英語学習については、図4から分かるように、「反対」とするものより、「賛成」とするものの割合が大きく、好意的な回答が多いことが示されている。北條他(2003)の調査においても、保護者は子どもが「小学校で英語や外国の文化などを体験的に学ぶこと」、「小学校で教科として英語を学ぶこと」の二項目に対して、平均値4.0以上を与えているところから、同様の傾向があることが分かる。なお、北條他(同上)は、中学校の生徒(163名)及びその保護者(108名)に対して、小学校英語教育に対する意識調査を5段階尺度形式のアンケートによって実施しているものである。

北條他(同上)の調査からは、小学校の英語活動で子どもに学習して欲しい内容として、「アルファベットの読み方・書き方」、「簡単な英語単語の読み方・書き方」、「簡単な英語文の読み方・書き方」が挙げられているが、これは既に中学生になっている生徒の保護者としての希望であろう。本調査における保護者においては、図5から分かるように、「読み書き」について高い平均点は与えられていない。

小学校指導要領の改訂によって、外国語活動(英語活動)は、正式に小学校段階での教育内容となった。図4のQ7:言葉の習得は早い方が良いので賛成、Q9:これからの社会に必要なから賛成に現れた、保護者の声、社会の要請を汲んだものとなったと言えよう。学校教育における外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うこと」である。「小学校学習指導要

領解説」によると、活動内容は、「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること」、「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」、「言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること」、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づくこと」、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくこと」、「異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深めること」の6項目である。図5で高得点を得ているQ22:楽しく遊んで好きになること、Q24:発音やリズムに慣れること、Q25:異文化に触れることを重視、が含まれていることもまた付け加えておく。

## 引用文献

- Benesse教育研究開発センター(2007). 第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)報告書(速報版)
- 北條礼子・松崎邦守(2003). 小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査:山梨県I中学校の場合 上越教育大学紀要 第23巻第1号, pp.1-9.
- 文部科学省(2008). 小学校学習指導要領解説 外国語活動編
- 寺尾裕子・古川雅文・金榮淑・鈴木正敏(2008). 小学校英語教育に対する児童および保護者の態度に関する研究(Ⅰ)ー児童の態度に関する調査から 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター紀要), 20, 1-8.

(2008. 9. 1 受稿, 2008. 11. 28 受理)